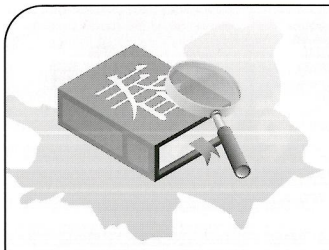

シリーズ　春日部研究　第9回

読みもの

春日部の観光楽（学）

～春日部に名湯あり!?～

共栄大学国際経営学部専任講師 小堀　貴亮

はじめに

共栄大学国際経営学部観光ビジネスコースに所属している小堀貴亮と申します。専門分野は観光地理学、特に温泉地を中心に研究しています。今回から3回にわたり、春日部の観光に関するコラムを担当させていただくことになりました。

まず、初回はご挨拶もかねて、私の専門である温泉について記させていただきたいと思います。というのも、実はこの春日部には知る人ぞ知る名湯があるからです。

埼玉の温泉

かつて、大分の由布院という日本一の人気を誇る温泉地に住み、別府という世界一の温泉地にある大学に勤めていた私に対して、当時の同僚や教え子たちから「埼玉は温泉がなくてかわいそうですねぇ」と、よく言われてしまいます。確かに、一般的には埼玉に温泉というイメージを抱くことはなく、事実2012年現在、環境省による埼玉県の温泉関連のデータによると、温泉地数は22で全国ワースト3という状況です。ただし、温泉地とは宿泊施設のある場所を指し、日帰り施設のみの場所は含みません。温泉利用の公衆浴場数を見ると74でワースト12位と順位が上がります。このように、埼玉県内でも、温泉法に基づく天然温泉が存在し、意外にもかなり良質の温泉が数多く存在しています。たとえば、アルカリ性の強い温泉日本一は、なんと埼玉県の都幾川温泉で、pH11.3という強アルカリ性を示しています。泉温も、低い冷鉱泉や低温泉が多いのですが、中には42℃以上の高温源泉もあります。もっとも、最近掘削された温泉が多いので、あまりなじみがないのも仕方がありません。

日帰り温泉施設の発達

近年、埼玉県内では日帰りで気軽に入浴できる温泉施設が急増しています。今や、都市部や住宅地を車で運転していても、「温泉」と名のつく施設をたくさん見ることができます。その背景には、①高齢化社会を迎えて健康センターや福祉センターなどに付設して温泉浴場が作られたこと、②ふるさと創生一億円事業や農水省の農業構造改善事業の諸施策などによって、地域振興の一環として積極的に温泉施設を建設したこと、③従来温泉資源とは無縁であった非火山地域でも、地下1,000m以上の大深度掘削によって温泉を確保できるようになったことなど、多くの要因が指摘されています。こうした温泉施設の増加は、温泉観光客の行動形態を大きく変えることになりました。多くの温泉施設は、地元市町村内客や県内客のみならず、県外客にも広く利用されており、地域住民や観光客の両者にとって日帰り温泉施設の存在意義は大きいといえるでしょう。

春日部に名湯あり!?

このような中、春日部にもご多分にもれず、日帰り温泉施設が存在しています。特に「かすかべ湯元温泉」は、著名な温泉専門家や温泉ライターの方々からも絶賛されています。

源泉は地下1,200mより毎分432リットル汲み上げるPh8.76の弱アルカリ性単純温泉で、1988年12月掘削に成功し、1996年5月オープンと、埼玉県内の日帰り温泉施設としては比較的早い時期の温泉施設であるといえます。

施設の詳細については、様々な温泉本に紹介されているのでここでは割愛しますが、率直な感想を述べますと、多くの温泉専門家が口をそろえて言うように、この地にしてこの湯はまさに奇跡であると思いました。まずこの温泉の泉質は、この地域では大変希少な塩分のない弱アルカリ性単純泉で、何と日本三大美人の湯のひとつである島根県湯の川温泉と非常に似ており、まさに関東有数の美人の湯といえることができます。湯の色は茶褐色で、明記されてはいませんがモール泉（植物起源の有機質を含んだ温泉）のようです。その泉質から肌の角質を分解して、肌がつるつるになります。

高齢化社会やストレス社会といわれる現代社会の中で、温泉本来の機能である湯治が見直されている現状にかんがみ、現代版湯治場として、今後ますます大きな意義を有することになるでしょう。近くの名湯で心身ともに健康になりながら、ステキなひと時を過ごされてはいかがでしょうか?

共栄大学国際経営学部専任講師　小堀 貴亮 博士（学術）
1973年、埼玉県東松山市生まれ。2000年、千葉大学大学院修了。別府大学講師、大阪観光大学講師を経て、2012年より現職。専門は、観光地理学、温泉地域論。